鴻野 わか菜

『チェーホフ――七分の絶望と三分の希望』（講談社、2016 年）

著　沼野 充義

本書は、『群像』の 2014 年 5 月号から 2015 年 6 月号に連載された「チェーホフとロシアの世紀末」を改題し、加筆したものである。

連載当時のタイトルからも察せられるように、また本書の「おわりに」で、著者が「チェーホフの周りで渦巻くように展開していった、爛熟し、きなくさく、怪しく、神がかっているのに革命的でもあり、おどろおどろしくもあり、それでいてなぜか懐かしくもあるあのロシアの、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての姿を描いてみたく、時にはその勢いでスターリン時代や冷戦時代のソ連にまで足を延ばしさえもした」（351 頁）と記しているように、本書は、チェーホフという作家を中心に据えた上で、彼の生活と創作の場であったロシア社会とその文化の特質を多面的に描き出した、きわめて独創的なロシア文化論となっている。チェーホフの人生と作品に肉薄し、多数の新しい作品解釈と知見を示しつつ、19 世紀から 20 世紀のロシア文化、社会、政治の相関関係を俯瞰的に描き出した本書は、チェーホフを通じてロシアを理解し、ロシアというコンテクストの中でチェーホフを理解するという 2 つの役割を同時に果たしている。

たとえば、第 4 章「チェーホフとユダヤ人問題」では、チェーホフの最初の「婚約者」がユダヤ人であったことを話の端緒に、東欧ユダヤ人の歴史、ドストエフスキー、ソルジェニーツィンらのユダヤ人観が論じられ、それらの社会的・文化的文脈と対比しながらチェーホフ作品におけるユダヤ人の表象が詳細に分析される。それにより、チェーホフが短編「ロスチャイルドのバイオリン」において、ユダヤ人に偏見を持つロシア人の登場人物を戯画的なまでに吝嗇な男として描き、差別主義者がしばしばユダヤ人に特有であると考える性質をあえてロシア人に与えることで「民族的偏見の根拠を問い直す作業を行っている」（140 頁）ことが、鮮やかに指摘されるのである。

また、後期の代表作である『六号室』の分析に際しては、ロシア文学における狂気の系譜と精神病院の政治的利用の歴史（第 5 章「狂気と牢獄」）に続いて、19 世紀末ロシアのオカルトの流行（第 7 章「霊性の幸う国で」）を考察した上で、「『六号室』の患者こそは精神に変調を来たしたラネーギン医師の見た幻影ではなかったのか」（218 頁）という、説得力に満ちた新解釈を提示している。

さらに本書は、チェーホフの愛読者、研究者らが 100 年以上に渡って問い続けてきたがいまだ答えの出ない、いわばスフィンクスの謎のような難問に、真っ向から取り組んでいる。それはたとえば、「自分の主義や信条をあからさまに主張しなかったチェーホフは、宗教、革命につい

てどのように考えていたのか？」、「チェーホフは病を押してなぜサハリンへ行ったのか？」、「『かもめ』と『桜の園』はなぜ喜劇と題されているのか」といった、どれもチェーホフを理解する上で核となる問いであるが、本書は緻密な作家研究と比較文化的アプローチに基づいて、これらの難問に新たな研究成果としての回答を提示している。

チェーホフをめぐる難問の中でももっとも重要だと思われるのは、チェーホフの人間観、他者との関係である。並外れた観察力のもとに様々な性格や階層の人間の姿を淡々とした筆致で描き出したチェーホフは、ともすれば、他者を自分とは無関係な対象として一定の距離から眺め続けた「冷たい」人物だと思われがちだった。しかし、本書で著者は作品や書簡等をもとに丹念に作家の人物像をたどり、「リアリズム文学の出発点にあり、どうしても完全にぬぐい去ることができないのは、「タイプ」（典型）という考え方だったが、チェーホフは様々な人間のタイプを描きながら、じつはタイプによって分類されない人間の面白さを繊細に観察し続けた」（194 頁）と結論づけている。本書が提示するチェーホフ像を読んで、評者は、やや叙情的に過ぎるかもしれないがヴィム・ベンダース監督の『ベルリン天使の詩』における天使像を連想した。ベンダースの映画において天使は、人間を見守り、その観察を書き留め続けるという職務を担っているのだが、職務遂行には必要のないはずの愛や共感という感情に苦しんでいる。人間を観察し、タイプではなく個々の存在として理解し描くことに専念したチェーホフも、それと同じような共感を味わい、だからこそ沼野氏が指摘するように、共同体から疎外された他者に対する「社会的な責任感と、さらには義憤にさえ近いもの」（290 頁）を感じたのではないか。

本書は、精神障碍者、流刑民をはじめとする社会的弱者への差別や疎外、児童体罰や監視社会といった問題に対するチェーホフの批判意識に焦点を当てることで、現代社会の問題をも照射しようとするものでもある。そのことは、「ひょっとしたらいまの日本は、社会全体がソフトな目に見えない壁に囲まれた監獄のようなものになっていやしないか。チェーホフの陰鬱な顔を見ていると、そんなことを問いかけられているような気がする」（170 頁）、「長々と書いてきたのは、ロシアの文豪のことでは全然なく、じつはいま日本に生きる私たちのことではないのだろうか。七分の絶望と三分の希望というのは、現在の日本と世界に対して自分自身が抱いている気分のことかもしれない」（351 頁）という著者の言葉からも明らかであり、浦雅春氏も書評において指摘している通りである（『ロシア語ロシア文学研究』48 号）。本書には「チェーホフは声高に政治的主張を唱えないタイプの文人だったが、こんな微妙な方法を用いて、民族的偏見の脱構築を行っていた」（141 頁）という一節があるが、その表現を借りるならば、本書はとりもなおさず、チェーホフと沼野氏という二人の文人が、偏見によって硬直化した社会に文学の力によって揺さぶりをかけようとする優れて現代的な思想書でもある。

また、本来は自明のことであるとはいえ、人文学研究が軽視されている現在の状況下ではあえて言っておきたいのだが、本書は、一作家の内面に迫った文学研究書であること自体により、社会的に重要な意味を持っている。他者への寛容が失われつつある排他的な現在の社会で、他者の言葉を理解しようする人文学研究は、他者への無関心や無理解から生じる差別や戦争の対極にある営みだからである。文学研究の古典的形式である一作家研究は、作家の生涯、過去や同時代の

文化との関係性、社会・政治・宗教・文化的背景等を考慮しながら、膨大な作品や資料を分析し、他者の言葉やその背後の思想を理解しようとする。日常生活において他者の言葉を理解するためにそれと同じ労力をかけることは難しいが、発せられた言葉の背景にある他者の感情や価値観の重要性を人文学的方法論を通じて学ぶことは、人々のいっそうの相互理解と共感を必要とする現代社会においてきわめて重要な意義を持っており、本書はその最上の実例なのである。